

属性と変化についての覚え書き

坪井 栄治郎

1. 「変化」の扱い

Levin&Rappaport Hovav らの語彙概念意味論の枠組みでは、項の具現の仕方に影響を及ぼす、いわゆる "grammatically relevant" な意味に注目し、動詞が表す行為の結果として変化が生じることを表す「結果動詞 (result verb)」と、そのような変化を表さずに行為の様態を述べる「様態動詞 (manner verb)」という対立が重要なものとしてしばしば取り上げられる。この二分法については、個別の動詞の分類について議論もある¹が、おおむね妥当なものとして、さらにその際に「変化 (change)」とされるのは、文脈依存的な推論などによって得られるものではなく、あくまでも動詞に語彙的に指定 ("lexicalize") されているものとして想定される²のが一般的と思われる。しかしながら、様々な言語現象を見た場合、個々の言語現象に関与する「変化」概念は必ずしも同一ではなく、項の具現といった特定の観点から規定されたものだけに「変化」を限定せず、より広い視点から「変化」というものを見ることで有益な知見が得られることもある。本稿はそうした観点から「属性³」や「変化」について考察することを目的とする。

2. 変化の有無とその認定

Rappaport (2008) は、変化があるとされている場合でも各種のチェックテストにかけてみると必ずしも変化を認定すべきではないことがあることを論じている。

Rothstein argues that in examples like (39) below, the predicate *read Little Women* is associated with a BECOME event, corresponding to the book becoming read, which imposes the incremental structure on the activity of reading (pp. 109-111).

(39) *My daughter read Little Women.*

I will bring two kinds of evidence that *read a book* does not have a BECOME event. The first is really evidence that the direct object of the verb is not an affected object. Rothstein (2004:139) argues that the argument of the BECOME event is the affected theme, the argument to which the action is done. [...] However, as already mentioned above, in the case of *read, peruse or memorize*, if there is an affected participant, it is the subject. The following is taken to be a diagnostic for an

affected entity [...].

(40) #*What we did to the road sign/to the letter at the bottom of the chart was read it.*

(Rappaport 2008: 33)

しかしながら、こうしたチェックテストによる判定はいわば "rules of thumb" であって、それがどのような文法的特徴の有無を示すものと解釈すべきなのか、その判断には注意が必要である。実際、Rappaport 自身、Rappaport Hovav and Levin (2001) では、変化を語彙的に含意しない動詞として分類されるであろう打撃・接触動詞でも *What happened to...was~* というテストにパスすることにふれている。Rappaport Hovav and Levin (2001) に沿って言えば、このチェックテストは force recipient であればパスするものであり、必ずしも変化の有無によってではなく、行使される力が感じられるかどうかで合否が決まるテストだということになるだろう。

上に引いた部分に続けて Rappaport (2008) はさらに次のように言う。

The second, more important, argument is that verbs like *read*, even on their telic reading, are not associated with a result state, which all predicates assumed to involve a BECOME event should have. Verbs such as *read* and other information ingestion verbs, such as *study* and *peruse*, do not pass any of the tests which have been offered to prove the existence of a state predicate. One such test involves the adverbial *again* [...]. It has been claimed that sentences with verbs which lexicalize a result state are ambiguous with the adverb *again*. In (41a) below, for example, there is a reading in which the door had been open and I caused the door to be in this state once more (though we do not know if it had been opened by anyone before). The other reading is of course one in which there are two events of door-opening. Transitive verbs which do not lexicalize a state do not show this ambiguity. *I tickled my daughter again* can only mean that there were two events of my daughter having been tickled. The verbs in (41) all clearly involve a lexicalized result state. In contrast, the verbs in (42) are traditional incremental theme verbs, and they do not show this ambiguity.

- (41) a. *I opened the door again.* (ambiguous)
b. *I closed the window again.* (ambiguous)
c. *I filled the jar again.* (ambiguous)
- (42) a. *I read the book again.* (not ambiguous)
b. *I scanned the book again.* (not ambiguous)
c. *I perused the article again.* (not ambiguous)

Another test involves the durational time adverbial *for X time*. [...]

Related to this is the possibility of using *still* and the corresponding adjective or adjectival passive. [...]

Rothstein suggests that the change the book undergoes when being read is that of 'becoming read'.

But this would not distinguish the object of *read* from the object of any activity verb: if I tickle my daughter, we can say that my daughter has 'become tickled', but *tickle* would not be classified by Rothstein as a [+change] verb.

(Rappaport 2008: 33-34)

ここでは、*read*などの動詞が特定のものを指す目的語を取る telic 解釈の場合であっても *again* や継続時間を表す副詞表現が変化後の状態を修飾する解釈が不可能であることを示し、そのことを変化がないことを示唆するものと解釈しているが、この点に関連することとして Beavers (2013) は以下のように述べている。

...although I based the notion of accomplishment on a notion of affectedness that involve entailments of change, there are some accomplishments that do not entail change, including in particular performance verbs such as *play* or *perform*:

(57) *The troupe performed the play in/?for exactly five hours.*

Despite the fact that the predicate is telic there are no entailments of change: nothing is different about the troupe of performers or the play at the end of the event. This might suggest that there are other types of accomplishments not based on a notion of change. However, Tenny (1994: 73) suggests that performance predicates can be analyzed metaphorically as motion predicates, where the performer is a "theme" and the piece performed is the "path", based on the fact that in such predicates the performer progresses incrementally through the piece in an adjacent fashion. Thus such predicates are amenable to a scalar analysis, though we would have to say that the scale is a type of scale that does not correspond to lasting physical change. What other types of scales may exist is a matter of future work. (Beavers 2013: 703)

ここで Beavers は、Rappaport (2008) の変化の有無のチェックテストによれば変化がないとされるであろう *perform a play* のような例について、それを劇の進行というメタファー的な位置変化を表すものと考え得るとする Tenny (1994) の示唆に言及しつつ、劇を一種の *scale* と考えれば、こうした場合も変化を伴うこととして自らの *scalar model of change* で扱いうるものとしている。

たしかに *perform a play* などには物理的な変化はないだろうが、漸次進行的に「既演」部分が広がっていく、という意味での時間軸に沿った変化の累積は認めうる。*read a book* についても同様で、こうした場合には行為の遂行と同時進行的に累積していく行為の「痕跡」があり、それはそれぞれのページまで読み進んであり、何幕何場まで演じ終えてあるのかによって測られるような、客観的に観察可能なものである。Rappaport (2008) は、同じ *incremental theme* を取る場合でも目に見える変化が対象に生じる事象を表す *eat* などとは違って *read* の場合には変化無しとしており、当該の行為およびそれによって生じる影響が観察可能な具体的なものでない場合には変化を認めていないようだが、そうであれば変化がないものを何をもって *incremental* とする

のかが問われることにもなるだろう。

3. 属性叙述受身文の「変化」

perform a play や *read a book* などのような場合にもある種の変化を認めることは、通常その要件の一部として対象の変化が挙げられる受身文をそうした述語が構成しうることによっても要請される。これらの表現が表す事象に認められる変化が対象の物理的なあり方の変化ではないとしても、当該の行為が行われればその結果としていわばその痕跡が累積していくという点で、行為とその結果としての変化の結びつき自体は、五感で観察可能な物理的な変化を表す典型的な変化動詞と同じく直接的である。その一方で、行為とその結果としての変化の結びつきがそのようには直結していない場合もある。

益岡（1987）などで属性叙述受身文と呼ばれる「この論文は、チョムスキーに数回引用された。」のような日本語の受身文の場合、著名な学者が引用する論文は優れているという想定に基づいて、こうした受身文はそのような引用行為によって主語の指示物に一種の箔が付くという変化を述べるものと解釈されて容認されると思われるが、このような変化は当該の行為から必然的に帰結するわけではなく、あくまでそのような行為がもたらしうる結果として予想され、推論されるものであるにすぎない。このため、どのような変化が生じると話者が想定するのか、その想定自由度に応じて、想定される変化は語彙的に変化が指定されている場合ほどには限定されず、生じたと想定される変化も抽象的なものであることも多い。しかしそうであっても、語彙的に変化を含意する変化動詞の場合にむしろ似て、変化の存在自体が問題にされることはさほどないように思われる。

しかしながら、属性叙述受身文と呼ばれるものには、どのような意味での変化が表されているのか自体がはっきりしない場合もある。和栗（2005）は、「A社の携帯電話は、大学生の68%に使われている。」のような種類の属性叙述受身文は、主語の指示物が上の例の「箔付け」のような変化を被っていることを格別述べているわけではないとして、こうした例を「疑似属性叙述受動文」と呼び、「この論文は、チョムスキーに数回引用された。」のような「真正属性叙述受動文」と区別している。

坪井（2002）では、単に「属性叙述受身文」という別カテゴリーとして分類したところでそれが受身文として容認される理由の説明にはならず、そうした受身文にも受身文に要請されるある種の変化を認める必要があることを論じ、さらに属性叙述受身文を構成しうる動詞は一般に変化の含意のない動詞であることを指摘して、属性叙述受身文とは変化を含意しない動詞が変化を伴う事象を表すものと再解釈されることで可能になっているものと考えべきであること、さらに、そう考えることによって、変化の含意のある動詞の場合には属性叙述受身文になりづらいことを単一経路制約⁴によって説明することが可能になることなどを論じた。

その際には、和栗の言う疑似属性叙述受動文にもある種の変化を認め、それを「identityの構成・更新」と呼んでおいた。あるものがどのようなものであるのか、つまりそのもののidentityは、物理的な状態のような、多くの場合には可逆的⁵なそのもの自体の存在様態によるよりは、不可逆的で取り消し不可能な履歴や経歴によって構成される面が大きい。汚れが付いたものをきれいにすることは容易でも、履歴上の汚点は消すことはできない。いくら前非を悔いて改心した

善人になっても、「前科者は前科者のまま」なのである。

そうした履歴・経歴には、他者とどう関わり、どのような関わり方をされるものなのかという、他者との関係性のあり方も含まれる。和栗の言う疑似属性叙述受動文は、主語について述語部分が表す他者の関わり方を結びつけて語ることでそのものの過去の履歴・経歴の集積に付け加えられる新たな延び広がり部分を構成⁶し、それによって identity が更新されることを表す。この意味での変化は、事象展開の一部としての変化の発生・属性の成立とはかなり性質が異なるものだが、受身文の容認可能性という点から見れば、これも一種の「変化」と考えるべき⁷であろう。

4. 属性と因果性の認定

前節で見たように、属性叙述受身文の「identity の構成・更新」とは、それ自体は当該の属性を対象にもたらずわけではない事柄を、対象を特定のものとして規定する関係性の一つとしてそれに結びつけて語ることによってその事柄を対象の identity を更新する新たな属性として導くものだが、これとは事柄と属性の結びつけの方向性が逆で、言わば属性からそれと因果的な関係にある事柄を遡及的に認定して述べる場合がある。

動詞が表す変化結果としての属性は、それに先立つ原因事象を容易に想起させるが、典型的に形容詞によって表されるような属性は、時間性のない、時間的展開を前提しないもののあり方に関わるものとして、それが成立するに至る過程を通常想起させない。例えば「白い」という言葉で描写されるような色合いのシャツがあった場合、その白さが何らかの先行事象によってもたらされたものと意識される場合、例えば黄ばんでいたはずのシャツに黄ばみがなく白い場合、には、当該の属性が変化の結果であることを含意する「(黄ばみが落ちて) 白くなったシャツ」、 「漂白されたシャツ」といった表現が用いられるだろうが、特にそのような意識なく単にその色を言うのであれば、「白いシャツ」のように言うことになる。

形容詞的な述語で表現される属性に関してそれをもたらずものとして問題にされうるのは、上に挙げたような、当該の属性を結果として内に含む単一の因果連鎖を構成するような事柄には限られず、その成立のための条件を整える役割を果たす間接的な原因である場合もある。単一複合事象内の原因事象と結果事象のような直接的な因果連鎖とは異なって、ある事柄がある属性成立のための条件を整える役割をするのにとどまる場合には、その因果関係の間接性の程度に応じてその因果的な関係は意識されづらくなり、それを言語化する場合には、その概念上の結束性の緩さを反映して、複数の節や使役形式などの複合表現が用いられることになる。例えば毎年全国各地から長距離ランナーがトレーニングにやってくる町があれば、それは *The city is one of the best training places for long-distance runners* / 「その町は長距離ランナーにとって最善のトレーニング場所の一つである」などと表現されるだろうが、何かの理由でその町がそのようであることの理由が問題にされて表現される場合には、*The high altitude of the city makes it one of the best training places for long-distance runners* / 「標高が高いので、その町は長距離ランナーにとって最善のトレーニング場所の一つになっている」といった表現形式を用いることになるだろう。

こうした文が表す属性と事柄との結びつきは、間接的なものではあるが、すでに見た identity の構成・更新の場合とは異なって、現実に存在する因果関係に基づくものである。上に挙げた例

であれば、その町が高地にあること⁸がそこでの有酸素トレーニングの効率性につながっていて、そこが高い有酸素能力を必要とする運動選手にとって好ましい場所であるのはそのことによっている。

しかし、あるものが何が原因でそのようなものとしてあるのかが意識されて言語化されるのは、今あるあり方とは異なる、そうでもあり得た別のあり方との対比が意識される場合であり、そこに認められる因果性は、何かの理由によって言わば遡及的に認定されてはじめて顕在化する。また、そのようにして因たる事柄の存在が意識されても、互いに独立の事柄の間の因果性は、単一事象内で直結している因果性とは異なって、果とされる事柄に対して因として結びつけるべき事柄が何であるのかは、必ずしも一義的には決まらない。ふたたび上の例に戻って言えば、その町が長距離ランナーのトレーニングに最適な場所の一つであるのは、高地にあることよりも、むしろ、清浄な空気と目を楽しませてくれる豊かな自然の中で交通事故の心配などをせずのにびのにび屋外で走れる環境の良さによるのかもたし、何が究極的な原因なのかはそこに因果性を見て取る者の判断に依存して認定される。その意味でも、こうした場合の事柄と属性との結びつきは、話者による認定に依存しており、その点で *identity* の構成・更新の場合に似る。

5. 変化の仮想と参照基準

話者による認定に依存する面が多いことは、こうした例においては（使役）変化表現が用いられていても、それはそれらが通常表す実際の（使役）変化⁹を表すわけではなく、当該の属性を変化の結果と仮想してのものであることにも表れている。上の例で言えば、長距離ランナーにとってトレーニングするには不向きな場所だったものが何か起きた結果良いトレーニング場所に变化したことが述べられているわけではなく、表されているのは高地にあることと良いトレーニング場所であることとの間の因果関係である。英語の使役変化表現を用いた文に対応する日本語の文は、いわゆるスル型の英語に対してナル型の日本語という一般的な違いを反映して、通常自動詞を用いた変化文になるが、実際に起きた変化を表しているわけではないという点で、対応する英語の使役変化文と変わらない。

このような、ある状態・属性を仮想された変化の結果として捉えて表現することは、こうした場合に限られるわけではなく、よく知られたものとしては、Matsumoto (1996) が論じている、以下のような主体的変化 (*subjective change*) 文がある。

Migi-ue no kado ga maruku natte iru shikaku (Matsumoto 1996: Ex. 16b)

Kare wa me ga dete iru / tsuriagatte iru. (Matsumoto 1996: Ex. 23a)

Sono heya wa shikakuku natte ire. (Matsumoto 1996: Ex. 24)

こうした主体的変化文について、Matsumoto (1996) は以下のように述べている。

I argue that it can be characterized as in (15) .

(15) A *-te iru* expression can describe the unexpected (unusual) character of the referent of its

subject NP as a result of a subjectively induced hypothetical process of change from its expected (normal) state to the state being described.

An object of an unexpected or unusual character is somehow felt to have undergone a change from its expected or usual state, and in this way an abstract process of change is induced in the mind of the conceptualizer. The resultative expressions under consideration are based on this kind of process. [...]

This view naturally explains why this kind of *-te iru* expression is limited to the description of unusual situations.

(Matsumoto 1996: 130)

ここで言われている "expected (normal) state" については以下のように説明されている。

I have argued that some resultative expressions in Japanese involve subjective change, or deviation from an expected state. What exactly is this expected state? There are several different sources for expected states. In some cases the expectation comes from what people regard as ideal states. In other cases it comes from common assumption about what objects are like in normal cases. In still other cases the expectation comes from speakers' (or hearers') personal assumptions about the particular object being referred to.

(Matsumoto 1996: 133)

ここでは3種類の"different sources for an expected state"が挙げられており、上に引用した3つの例文がそれぞれそれに当たる。最初に挙げられているのは、広く一般的に何らかの意味で規範的とされるものであり、典型的な例としては、人間の認知機構のあり方のためにある特定のものが規範(基本)的と認知される、丸や三角のような基本的な形状が挙げられる。二種類目は、個々の物事について広く世間一般によって通常のあり方と受け取られているもので、上の二つ目の例で言えば、人の目というものが普通どのようなものなのかについては、たいいていの人合意するある共通のイメージがあり、それが目の"expected state"に当たる。そのような一般性・共通性に欠けるのが最後の三種類目で、一般的には四角いものであるはずの部屋というものについて、何らかの理由でそうは思わずに部屋とは丸いものと思っている人がいたとしたら、その丸い形をした部屋のイメージがその人にとっての部屋の"expected state"であり、そういう人にとっては上の3つめの文は普通に容認できるものになる。このような、特定個人依存的な思い込み("personal assumption")が三種類目の"source for an expected state"に当たる。これらは、それぞれが妥当する一般性の程度において異なるものの、いずれも、もののあり方についての予めの了解のされ方を指しており、Matsumoto (1996)によれば、こうした主体的変化文は、そのようなある種の認知上の参照基準(cognitive reference point)との食い違いをそこからの変化として捉えて言語化するものだということになる。

6. 変化の仮想の基盤

Matsumoto (1996)が扱っている主体的変化文は主に物の形状に関わるものであるが、実際に

は物の形状でない場合でも同様の表現は可能であり、ある属性を描写するのに変化を仮想することはかなり一般的な現象のように思われる。物の形状以外の例としては以下のようなものがある。

Kim eats only reduced fat mayonnaise. (Koontz-Garboden 2011: 295 fn. 9 Ex. 1a)

Patients with Down Syndrome have a shortened life expectancy. (Koontz-Garboden 2011: 295 fn. 9 Ex. 1b)

これらの例では、標準的な脂肪含有率と平均寿命がそれぞれの参照基準になっていると言えるだろう。

しかしながら、4節で見たような因果性を表す仮想変化文の場合には、格別規範的な参照基準が関与しているようには思えない。そこで挙げた例で言えば、仮想されている変化が参照基準との食い違いに対応するものであるのならば、「長距離ランナーにとって最善のトレーニング場所ではない」ことが参照基準として存在していることになるだろうが、そのような想定は無理であろう。以下の例についても同様である。

[*The time taken for a pendulum to swing from one extreme to the other and back (its period) depends on the width of the swing (the amplitude) : a longer swing takes more time. However, Galileo discovered—sometime around 1600—that as long as the amplitude is kept small, changes in amplitude have no significant effect on period. He realised that*] *this would make a small-amplitude pendulum useful as a time-keeper [...].*

Human vision is made possible by the presence of light sensitive cells in the eye called rods and cones.

最初の例について言えば、振り子の振れ幅が一定程度以下の場合に振れ幅の違いは周期に影響しないことが知られる前にはそもそも振れ幅が時計としての有用性に関係するものとは思われていなかったのだから、振れ幅の小さい時計は役に立たないものと思われていたわけではないはずである。次の例は少し微妙だが、現在時計が用いられていることに表れているように、目が見えるのは目に桿状体や円錐体があることによるという因果関係が述べられているのであって、視覚機構に縁のないままの生物も多いことを考えても、長い進化の過程で視知覚への道が拓かれていく前に視知覚不能ということがそれに照らして事柄を理解するための参照基準として存在したことを前提にしているわけではないだろう。

変化が仮想されていても必ずしも予め存在する参照基準に基づくわけではないことは、多値的対立に基づく属性の場合にはさらにはっきりする。例えば、用途に応じて作られる人工物の場合、その形状・仕様は必要に応じて自由に選択出来るものであることが多いが、例えば部分ごとに異なる色分けがなされている器具の色分けの理由を「ここが青くなっていてここが赤くなっているのは、ここを押すとスイッチが入ってここを押すと止まるから（で、その方が信号との連想で分かりやすいから）だ」のように述べる場合、参照基準となるような特定の色を変化元として

想定する必要は格別ないだろう。¹⁰

ただし、こうした場合にも、今あるようなあり方をしてるのであって、それとは異なるあり方をしていない理由が述べられているという意味で、ある種の比較の対象は存在しているように思われる。Matsumoto (1996) で扱われている物の形状の描写の主体的変化文と異なっているのは、それが認知上の参照基準というような、予め確立した特別な地位を持つものではないという点である。物の形状の認知には、Matsumoto (1996) に関連する認知心理学の文献が引用されているように、人間の認知機構のあり方を反映して少数の基本的な形状が参照基準として働き、様々な形状の認知およびその言語化の際には、そうした参照基準に依ることが認知上効率的であるため、物の形状を描写する際には参照基準的形状との食い違いを主体的変化文を用いて述べることになる。変化とは、順序づけられた二つの状態間の差を指して言うので、「変化後」と対比される「変化前」として何らかの特定の状態が通常想定されるが、上で見たように、変化表現を用いて表されるものには特定の「変化前」がない場合がある。そうした場合をも含めるならば、仮想変化文は「他のあり方であり得たものの、今あるあり方」を述べているのであって、予め確立している認知上の参照基準とは、そうした「あり得た他のあり方」の特殊事例に当たるものと考えられる。

4 節で因果性を表す仮想変化文について見たが、因果性を反事実性条件に置き換えて、A があるから B は今あるようなあり方をしていて・A がなければ B は今あるようなものとしては存在しない、という関係を表すものとして了解してみれば、因果性も今あるあり方とは異なるあり方に対する参照が本質的な重要性を持つものとなる。予め確立している認知上の参照基準が特に関与しない仮想変化文が表しているのは、変化と言っても言わば未定状態からの定状態の成立であり¹²、その意味では Matsumoto (1996) で扱われている物の形状描写の主体的変化文の場合以上に状態の移行・属性の変化があるとは言い難い面があるが、その捉えづらいものを言わば手持ちの認知の鋳型のどれかに持ち込んで言語化する際に、今あるあり方とは異なるあり方への参照が本質的な重要性を持つ「変化」のスキーマにはめ込まれて、当該の属性を変化結果として表現する（使役）変化文で表現されるのではないだろうか。

7. 変化と状態変化動詞の空間用法

Koontz-Garboden (2011) は、次に引いた例の *darkened* のような "derived stative" に対して、動詞の意味から使役事象を削除して結果状態だけを残すことによって対応する形容詞（この場合であれば *dark*）と同じ意味を導く従来の分析に対して、こうした用法は対応する形容詞とは異なって事象性を部分的に残している点で対応する形容詞とは意味が違うことを論じ、それを状態変化動詞の空間用法の一種と見なしている。

He has no scars but there is a slightly darkened portion of skin on his right leg, near the femoral artery, which he has had since birth ...
(Koontz-Garboden 2011: Ex. 3a)

I argue that derived statives are derived from extent uses of COS [change of state: E.T.] verbs [...].

These are particular kinds of uses of COS verbs, like those illustrated in (5), in which the change

entailed by the verb, rather than taking place in a temporal domain, takes place instead in a spatial domain. In (5a) [*His skin darkens on his right leg near the femoral artery.*: E.T.], for example, although there is no temporal change, and thus no preceding event if by event one means event of temporal change, there is instead an event of change in space. If one conceives of the leg as an axis composed of a series of points in space, the claim of (5), I argue, building on work by Gawron (2009), is that going along this axis, the degree of darkness changes, so that there are certain points at which the degree of darkness of the leg is non-identical.

Koontz-Garboden (2011: 288-289)

しかし、Koontz-Garboden 自身が脚注 9 で認めているように、本節の最初に同所から引いておいた *reduced fat mayonnaise* や *shortened life expectancy* などが空間用法の一種として扱うことのできない、別途扱われるべき別物とされることになるのは問題であろう。また、何らかの *spatial axis* を想定し、その軸上の個々の点を順次走査・比較して見いだされる差を空間用法が表す変化と見なすわけだが、空間には時間のようなものの場合にわかりやすい形で想定できる走査対象のあらかじめの順序づけ (*orderedness*) はない。変化を言うために必要になる、空間を走査していく継時性・走査対象の順序づけを認知主体の主観的 (*subjective*) な走査に依らずに言うことがどのように可能なかは説明されないままである。

時間軸と同じようなある程度以上の客観性のある空間軸上の変化として仮想変化文を扱うことができるのであれば、変化の仮想というような実体のはっきりしないものに言及せずすむが、*The road descends/ascends slowly* の *descend* と *ascend* の違いや *slowly* の意味を適切に捉えようとすれば、*subjective* な継時的な移動または注視点の移動を想定せざるを得ないだろうし、そうした仮想的な移動を想定しない限り、*The highway entered California then* [現実の具体物の移動] と *The highway enters California there* [仮想上の具体物の移動] と *The mountain ranges goes from Canada to Mexico* [注視点の移動] の区別¹⁾ をするのも難しい。実際、Matlock (2004) のような、仮想移動の例文を用いて実験を行い、そうした文の理解に際しては実際に認知的な *simulation* が行われていることを示唆する結果が得られたことを報告している研究もあり、言語を用いる認知主体の認知活動の一部として変化や移動の仮想を認める必要はいずれにしてもあるように思われる。その内実のあるべき規定の仕方については本稿では棚上げせざるを得ないが、仮想変化文に関連すると思われるながらここではまったく扱わなかった現象をも合わせて属性と変化についてのより包括的な考察を行うべく、以上のことを覚え書きとしてここに記しておく。

注

- 1) Levin and Rappaport Hovav (2013) 等の議論参照。
- 2) Rappaport Hovav (2008) 等。
- 3) 一時的 / 恒常的という違いを問わず、ものの「あり方」全般を指す包括的なものとしてこの言葉を用いる。また、そのような意味での属性が成立することを「変化」と呼ぶことにする。変化についてのより一般的な観点からの議論については、野矢 (2002) 等参照。
- 4) より一般的な規定としては、Matsumoto (2013) の *The Single Development Constraint* がある。
- 5) 世界についての信念次第でほとんどの物理的変化は可逆的なものでありうる。

- 6) 野矢 (2002) の、それについて語るたびごとに意味論的に変化する、「四次元連続体」としての固有名の指示物、という概念参照: 「「N」という固有名は、それをを用いた文の発言に応じてその指示対象を異ならせます。単純に言って、Nさんという四次元連続体は延び続けるわけです。だから、Nさんについて語る言語は、時々刻々その指示対象を異ならせ、意味論的に別物になっていきます。」(野矢 (2002: 276))
- 7) 日本語の属性叙述受身文と呼ばれるものにおいてはこのような意味の変化も文を容認可能にする要因として働くと考え得るしても、どのような「変化」が個別言語の個々の構文において意味を持つものなのかは個別に考えるべき問題である。日本語の属性叙述受身文についても、それが容認可能なものになるには他にも条件がある。この点については坪井 (2002), Tsuboi (2010) 参照。
- 8) 低地でも低酸素状態であれば高地トレーニングと同じ効果が得られることを考えれば、高地での有酸素トレーニングの効率の高さの原因として重要なのは、実際には標高の高さ自体よりも標高の高さによる酸素の薄さである。こうした場合に何を原因と捉えて表現するのかには、各種の認知モデルに基づいた換喩的な見立てが関わっている。関連する点については、Talmy (2000) の第4章および第7章などを参照。
- 9) 英語の *make* 使役がその基本的な用法において使役変化を表すことは日本語の「…になっている」が本来変化を表すものであることほどには自明ではないかもしれないが、Talmy (2000) に従えば、*make* が表す基本的な使役関係とは、使役者が被使役者に対して何らかの力を行使して、それがなければそうはならなかった状態・行為へと被使役者を追いやることであり、抽象的な場所の移動として属性の変化が捉えられると考えれば、*make* 使役に使役変化を認めることは可能と思われる。
- 10) 色のような多値的な対立によって規定される属性とは異なって、例えば「厚い/薄い」のような二値対立的な属性の場合、参照される特定の基準（この例ならば、基準となる平均的な厚さ）が通常存在し、それとの比較でその属性の有無が云々されるので、「この器具は、スイッチのあるところに力が加わるので、スイッチ部分が厚くなっている」のような仮想変化文には参照基準が関与する。
- 11) こうした点については松本曜氏の一連の研究を参照。
- 12) こうした場合に用いられる述語が本来発生や作成を表す「なる」や *make* であることと当然関係すると思われるが、その点についての考察は別稿に譲る。

参考文献

- Beavers, John. 2013. "Aspectual classes and scales of change." *Linguistics* 51-4: 681-706.
- Gawron, Mark. 2009. "The lexical semantics of extent verbs." San Diego State University, ms.
- Koontz-Garboden, Andrew. 2011. "The lexical semantics of derived statives." *Linguistics and Philosophy* 33: 285-324.
- Levin, Beth and Malk Rappaport Hovav. 2013. "Lexicalized meaning and manner/result complementarity." *Subatomic Semantics of Event Predicates*, B. Arsenijević, B. Gehrke, and R. Marin (eds.), 49-70. Dordrecht: Springer.
- 益岡隆志. 1987. 『命題の文法』. くろしお出版.
- Matlock, Teenie. 2004. "Fictive motion as cognitive simulation." *Memory and Cognition* 32-8: 1389-1400.
- Matsumoto, Yo. 1996. "Subjective-change expressions in Japanese and their cognitive and linguistic bases." *Spaces, Worlds, and Grammar*, Gilles Fauconnier and Eve Sweetser (eds.), 124-156. Chicago: The University of Chicago Press.
- Matsumoto, Yo. 2013. "Constraints on the co-occurrence of spatial and non-spatial paths in English: A closer look." Kobe University, ms.
- 野矢茂樹. 2002. 『同一性・変化・時間』. 哲学書房.
- Rappaport Hovav, Malka. 2008. "Lexicalized meaning and the internal temporal structure of events." *Theoretical and Crosslinguistic Approaches to the Semantics of Aspect*, Rothstein, Susan D. (ed.), 13-42. Amsterdam: John Benjamins.

- Rappaport Hovav, Malka and Beth Levin. 2001. "An event structure account of English resultatives." *Language* 77: 765-797.
- Rappaport Hovav, Malka and Beth Levin. 2012. "Lexicon uniformity and the causative alternation." *The Theta System: Argument Structure at the Interface*, M. Everaert, M. Marelj, and T. Sioni (eds.), 150-176. Oxford: Oxford University Press.
- Talmy, Leonard. 2000. *Toward a Cognitive Semantics*. Vol. 1. The MIT Press.
- Tenny, Carol. 1994. *Aspectual Roles and the Syntax-Semantics Interface*. Dordrecht: Kluwer.
- 坪井栄治郎. 2002. 「受影性と受身」. 『認知言語学 I : 事象構造』, 西村義樹(編), 63-86. 東京大学出版会.
- Tsuboi, Eijiro. 2010. "Malefactivity in Japanese." *Benefactives and Malefactives: Typological Perspectives and Case Studies*, Fernando Zúñiga and Seppo Kittilä (eds.), 395-409. Amsterdam: John Benjamins.
- 坪井栄治郎. 2012. 「動的述語と属性」. *Language, Information, Text*. Vol. 19, 57-68.
- 和栗夏海. 2005. 「属性叙述受動文の本質」. 『日本語文法』第 5 卷 2 号, 161-179.